「いっぽいっぽ歩みを進めて　～避難生活に着目した防災学習～」

令和７年度　高知県学校安全総合支援事業（災害安全）

高知県教育委員会　拠点校　高知県立盲学校

## 拠点校の取組

### （１）拠点校の目標

目標を設定するにあたり、本校の学校安全における背景や課題は以下のとおりである。

**○登下校時に発災した場合の状況や安否確認について**

通学の方法が公共交通機関を使用した通学、自家用車や介護タクシーを使用した保護者等による送迎での通学、寄宿舎から約 130ｍの距離を徒歩での通学など様々である。特に単独で通学している生徒の安否確認や障害のある児童生徒がどのように安全を確保し、自分の身を守るかについてはここ数年の課題となっている。

**○児童生徒の学習について**

大きな地震が起こる前（緊急地震速報が聞こえる）、地震で揺れている時（揺れから身を守る）、揺れた後（１次避難場所、２次避難場所に行く）の行動については、比較的定着してきているが、その後の避難生活についての学習経験がまだ少ない。ライフラインが寸断された場所で長時間生活することができるのか（災害時にラジオ等を使用し、必要な情報を得ることができるのか、寝る時は普段の生活のように十分な寝具がないことも想定され、長い避難生活においてどのようにして睡眠をとるのか等）、また、学校が損壊等をして、別の場所に移動する必要がある時に、その移動先の場所を知っているのか等、発災後、命をつなぎ続ける生活について学習を深めていく必要がある。

**○保護者等について**

一昨年からの取り組みによって、保護者等の防災に対する意識は向上してきていると感じる。近隣中学校で開催される地域の防災イベントや、盲学校で開催した防災デイキャンプなど積極的に参加してもらえるようになった。学校で取り組んでいるシェイクアウト訓練や避難訓練など、防災学習について発信するとともに、保護者等とも避難生活について体験する場（防災キャンプ等）の設定を検討していく。

**○教職員について**

危機管理についてのマニュアルはファイルにまとめ、教職員１人１冊配布している。年間に数回、少しずつ改訂しており、改訂するごとに資料の差し替え等しているが、内容について全員が把握できているか不透明な部分がある。今年度は、教職員に様々な班の役割を知ってもらうことを目的に、災害時の組織図（班）を運営に差しさわりのない範囲で人員の入れ替えを行う等、工夫して組織力を強化する取り組みを進めていく必要がある。

**○地域との連携**

新型コロナウイルス感染症が拡大した数年前から地域関係者と直接関わりをもった活動がほとんどできていない。近隣中学校で実施された防災フェアに盲学校の教職員、PTA とともに参加したり、盲学校が主催する防災イベントや研修会の案内を行ったり、地域とのつながりを模索しているが、いつも参加者が限定されることが多く、まだまだ非常に厳しい状況が続いている。地域とつながる防災について取り組まれておられる専門家の先生に助言をいただいたり、防災イベントを休日開催にし、少しでも地域の方が参加できるようにしたりするなど、今年度中に地域とのつながりを深めるきっかけを作りたい。

これらのことを踏まえ、目標は、（１）自分の命を守ることができる幼児児童生徒（２）自分、幼児児童生徒の命を守る行動ができる教職員（３）視覚障害のある幼児児童生徒が安心して地域と共生できる地域社会の３つとした。

（２）具体的な取組

ア　防災教育

○避難訓練

本校では、学期に１回、避難訓練を実施している。２学期実施の地震火災避難訓練では、高知北消防署様と連携し、煙体験や放水体験、消防車見学を実施した。煙が充満するテントを移動することの難しさや、ハンカチを常日頃から携帯しておくことの大切さを児童生徒たちが、自分自身の身体を通じて感じることができるとともに、消防隊員の仕事を知るというキャリア教育の視点も踏まえて取り組んだ。また、熊本大学研究開発戦略本部技術部門の須惠耕二先生にご協力いただき、全盲児童生徒も津波の仕組み（海底が盛り上がり、津波となることや、津波は引き波があること、繰り返し襲ってくること等）がわかる模型「つなみる君」を借用して触察しながら学びを深めた。

教師と一緒に煙の充満するテントに入ろうとしている児童

放水体験をする生徒

模型「つなみる君」を触察する生徒

３学期実施予定の地震津波避難訓練では、２次避難場所までの流れを訓練した後、日本赤十字社高知支部と連携し、応急手当の実技体験を行う。盲学校の児童生徒は、日頃の小さなケガ（擦り傷や切り傷等）においても教職員も含めた「大人」に手当をしてもらうことが多い。簡単な処置ができる技能を身につけることが理想ではあるが、まずは、ケガをした時に自分で処置をしたり、児童生徒同士で処置をしたりする経験を通して、「自助」・「共助」の姿勢を育むとともに、バンダナやダンボール等の身近な物が手当にも使用できる（代用できる）ことを学んで欲しいと考え、計画している。

○総合的な学習の時間・総合的な探求の時間

中学部および普通科の生徒を対象に、災害発生直後から少し時間が経過した場面を想定し、学校が損壊等し、別の避難所となる県立高校まで実際に歩くフィールドワークを行った。その後、危険な箇所や心配なことをグループに分かれて話し合う活動を行った。また、災害が発生した場合の対応をクイズ形式で改めて復習したり、NHK 高知放送局（ラジオ）にご協力いただき、災害時情報収集の手段であるラジオについての学習（AM・FM）をしたり、実際にラジオを触って操作する体験を行った。そして２学期の最後には、学校で被災した場合を想定し、最低限の教職員と生徒が体育館で『授業』ではなく、『ただ過ごす』体験を行った。

フィールドワークの様子

グループで話し合い活動をする様子

ラジオの操作体験をする様子

被災した想定の中、体育館で過ごす体験をする生徒

**○外部機関や保護者等・地域との連携**

児童生徒だけを対象とした防災学習だけではなく、外部機関や保護者等・地域住民との連携強化も目的に取り組んだものとして「防災キャンプ」と「防災デイキャンプ」を実施した。

「防災キャンプ」は、学校で被災した状況を想定し、学校で１泊宿泊することを中心目標として実施した。日中は、NTT 西日本高知支店設備部災害対策室様を講師にお迎えして災害伝言ダイヤル「１７１」のデモ機を使って災害伝言ダイヤルについて学んだり、プールで着衣泳体験をしたり、グループに分かれて防災学習（防災小説・オリジナル防災すごろく）を実施した。就寝時は、学校の防災備蓄品であるエアベッドを使い、２次避難場所として予定している教室等で身体を休めた。４名の盲学校児童生徒が参加し、参加児童生徒の保護者等２名、教職員および教職員家族等の合計２７名で実施した。

災害伝言ダイヤルを体験する参加者

エアベッドに空気を入れる生徒

オリジナル防災すごろくに取り組む児童・参加者

「防災デイキャンプ」は、今年度のテーマでもある「避難生活」についても学びを深めることができるよう、起震車体験（高知県トラック協会様）、発電体験（四国電力株式会社高知支店広報課様）、ダンボールベッド体験（株式会社タケナカダンボール様）、災害時トイレ体験（盲学校教職員）、災害救助に関するサイエンスショー（高知みらい科学館様）を時間で区切ってグループで順に体験学習を行った。本校児童生徒・教職員だけでなく、保護者等や、地域住民、地域の福祉関係者など昨年度の防災デイキャンプよりも外部参加者が多く参加した。

ダンボールベッドで横になる生徒

発電の仕組みを学ぶ生徒

サイエンスショーで学校にある物を使って担架を作る体験をする生徒

イ　安全管理

○防災研修会（高知県学校防災アドバイザー派遣事業の活用）

本校の災害時の対応の中で、弱みのひとつである「福祉避難所」について学びたいと考え、高知県学校防災アドバイザー派遣事業を活用し、「コミュニティ防災」「避難所運営ゲームの開発と活用」「防災教育」についてご専門の高知大学 地域協働学部 地域協働学科 教授 大槻知史先生を招聘し、福祉避難所についての基礎的な講話と、福祉避難所受け入れについてのシミュレーションをグループワークで実施した。県内の学校に案内し、県内特別支援学校（高知若草特別支援学校、山田特別支援学校）より合計２名参加してくださり、共に学ぶ機会となった。

本校は「福祉避難所」の指定を受けているが、備蓄品の問題や福祉避難所運営の面で非常に課題が大きい。数年、福祉避難所開設訓練も実施できていないため、今年度の学びを生かして、来年度は、福祉避難所開設訓練を実施することを検討していきたい。

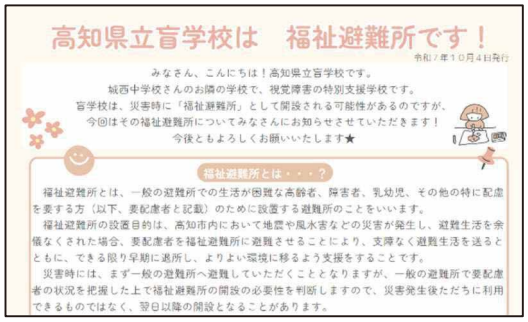
グループワークの様子

○防災フェアへの出展

非常時に頼りとなる地域の力を維持・発展していくために、PTA と連携し、近隣の中学校を会場として行われた防災フェアに出展し、盲学校が指定されている「福祉避難所について」のチラシの配布と、PTA と連携してバザー（焼き菓子の販売）を行った。防災フェアでの反省会では、近隣住民や関係者から「今後、盲学校とコラボレーションしてはどうか」という意見も出るなど、少しずつではあるが、「日頃から顔馴染みの存在」に近づきつつある。

盲学校のブースの様子

福祉避難所についてのチラシ（一部）



高知県立盲学校は　福祉避難所です！

令和7年10月4日発行

みなさん、こんにちは！高知県立盲学校です。
城西中学校さんのお隣の学校で、視覚障害の特別支援学校です。
盲学校は、災害時に「福祉避難所」として開設される可能性があるのですが、
今回はその福祉避難所についてみなさんにお知らせさせていただきます！
今後ともよろしくお願いいたします★

福祉避難所とは・・・？

福祉避難所とは、一般の避難所での生活が困難な高齢者、障害者、乳幼児、その他の特に配慮を要する方（以下、要配慮者と記載）のために設置する避難所のことをいいます。

福祉避難所の設置目的は、高知市内において地震や風水害などの災害が発生し、避難生活を余儀なくされた場合、要配慮者を福祉避難所に避難させることにより、支障なく避難生活を送るとともに、できる限り早期に退所し、よりよい環境に移るよう支援をすることです。

災害時には、まず一般の避難所へ避難していただくこととなりますが、一般の避難所で要配慮者の状況を把握した上で福祉避難所の開設の必要性を判断しますので、災害発生後ただちに利用できるものではなく、翌日以降の開設となることがあります。

（３）取組における成果と課題

〈成果〉

○防災教育

令和６年度までの学習で、地震の揺れから身を守ったり、地震発生直後や２次避難場所まで避難したりするまでの流れ等は、概ね身についている。今年度のテーマは、これまでの東日本大震災や熊本地震では障害のある人の災害関連死の割合が高いことが分かっていることから、災害関連死を防ぐために「避難生活」に着目して実施した。「防災キャンプ」では、普段家庭で使っているような使い慣れた十分な寝具がない、テレビもない学校の教室等で一晩過ごす体験をしたことで災害時に学校で避難生活を送ることになった場合の

様々な不安感やストレスを減らすことができてのではないかと考えている。「防災デイキャンプ」では、児童生徒にとって誰もが見たことのあるダンボールが「ベッド」として使うことができる（自分の体重を支えることができる）ことを実感できるように実際に寝転がってみる体験をしたり、災害時にトイレが使用できなくなった場合を想定して、排泄物に見立てた水に凝固剤を入れて固め、ビニール袋の口を閉じてゴミ箱に捨てたりする体験を行った。

模擬体験ではあるが、避難生活のイメージをもつことができたと考えている。また、災害時のトイレ処理体験を通して、ビニール袋の口をくくって閉じることがまだ難しい児童生徒が複数おり、基本的な生活技術として自立活動の時間等で取り組む必要が明らかになったとともに、代替の方法は何かないのか考える良いきっかけとなった。

また、中学部および普通科の生徒が総合的な学習の時間・総合的な探求の時間に取り組んだ学習では、実際に校外の避難場所である県立高校まで歩いてみるフィールドワークを行ったことで、「電柱や建物が被害を受け、倒壊し、散乱しているかもしれない道を歩くことができるのか」、「頑張って歩いて、なんとか到着したところで自分達が過ごすことのできる場所があるのか」等、実際に歩いてみたからこそ感じることのできる多くの気づきが生徒たちから出た。また、被災した状況を想定して体育館で３０分程度過ごしてみる経験を通して、手引きが必要な生徒を他の生徒が「一緒に行こう」と声をかけて手引きする様子があったり、寒さを和らげることのできるマットが１枚しかない（想定）状況では、他の生徒に「この上に座っていいよ」と声をかける生徒がいたりするなど、他者を思いやる「共助」につながる様子が多くみられ、学校生活の全てで育まれた生徒たちの優しさをみることができた。

**○避難訓練**

各学期に１回取り組んでいる避難訓練と毎月１回周知なしのシェイクアウト訓練を実施している。２学期と３学期に実施した避難訓練では、１次避難場所や２次避難場所まで避難した後で防災学習として、２学期は高知北消防署様、３学期は日本赤十字社高知支部様にご協力をいただいて連携した学習を行った。２学期の高知北消防署様と連携した防災学習では、地震発生後に火災が発生した想定で煙が充満するテントの中を進む「煙体験」を行った。煙体験に取り組んだ児童生徒や教職員からは、「煙で進む方向を見失い、短い距離でも出口にたどり着くまでに時間がかかった」や、「低い姿勢で進んだほうが地面を確認しながら少し安心して進むことができた」など実際に体験することでこれまで学んできた「火事の時は姿勢を低くして進む」という知識に裏付けられた経験が積み重なり、学びを深めることができた。

毎月１回取り組んだシェイクアウト訓練では、学校のどこにいても児童生徒・教職員が自分の命を守る行動をとることができる力を身につけることができるよう、朝の会・HRの時間や昼休みの時間、授業途中の時間など、毎月違う曜日、違う時間を設定して実施した。Jアラートの訓練もシェイクアウト訓練と同様の流れで実施し、Jアラートの警報音を聞いて窓から離れたり、低い姿勢で身を守ったりする行動をとることができるようになってきた。

**○外部機関や保護者等・地域との連携**

「防災キャンプ」は初めての取り組みであったが、防災学習（災害伝言ダイヤル体験・グループに分かれた防災学習）をしたり、宿泊する経験を児童生徒・参加者とともに保護者等も経験したことで、普段の学校での防災学習のイメージをもったり、災害時に避難生活をするための道具や環境などを把握することができたのではないかと感じている。

参加した保護者等からの事後アンケートでは、「１７１体験でこれまで伝言を聞く側しか経験がなかったが、伝言を残す側の体験ができてよかった」、「来年も参加したいので開催してほしい」等の意見があった。

「防災デイキャンプ」では、防災学習のテーマである「避難生活」について学びを深めることができるような関係機関と連携し、ブースを設置した。今年度は、昨年度までに繋が

りができた近隣の福祉関係者様や近隣地区の自治会長様に「防災デイキャンプ」についてのチラシ配布のご協力をいただいたことで、近隣の福祉関係者様・地域住民の方が４名参加した。昨年度は近隣の関係者の来校はなかったため、盲学校のことについてや、盲学校の防災の取り組みについて啓発することができたと考えている。保護者等も３名参加してくださり、各ブースを体験した。近隣の関係者様、保護者等の方からの事後アンケートでは、「昨年も勉強になり、楽しかったので今年も参加した」、「ダンボールベッドに実際に座ったり寝たりする体験ができ、想像よりはるかに使い心地がよかった」等の感想があった。

〈課題〉

**○登下校時を想定した防災学習の実施を目指す**

本校の児童生徒は登下校の方法が様々であり、登下校時を想定した防災学習は小さい学習集団や個別学習での実施が現実的な状況であり、実施についてはお願いしているが、実際は担任や授業担当者に任せており、実施の実績はほとんどない。授業担当者等にお任せするのではなく、避難訓練後に登下校の手段によってグループに分けて防災学習を実施するなど、学習する機会を意識的に設定していく等、工夫をしていく必要がある。

**○大雨洪水等の風水害についての学習を充実させる**

令和５年度から高知県学校安全総合支援事業の拠点校として災害安全（地震・津波）についての学習を深めてきて、少しずつではあるが定着している様子が見られたり、年度を超えて系統的な学習を展開できていると感じている。ただ、大雨洪水の災害（風水害）について学ぶ機会がまだ少ないので、災害安全教育をより一層充実させるために、風水害についても防災学習として学ぶ機会を設定していく必要がある。

**○地域との連携を図る**

「福祉避難所」について数年継続している課題である。今年度、「福祉避難所」についての防災研修会を実施し、受け入れシミュレーションに取り組んだ。この研修会を実施した流れで今年度中に福祉避難所開設訓練の実施を検討したが、実施できなかった。

また、防災イベントについての参加アンケートを実施した際に、盲学校が福祉避難所であることを知っているか、福祉避難所の運営は地域住民と協力して行うことを知っているかの問いを加えた。どちらの質問にも「知らない」と答えた回答者がほとんどであった。福祉避難所開設訓練実施についての検討を進めると同時に、盲学校が福祉避難所であることや、福祉避難所の運営について地域関係者に発信をしていく必要がある。

（４）今後の取組

**【歩みを止めず学び続けるために】**

児童生徒がこれまで積み重なっている知識を基盤として行動できるよう、外部機関とも更に連携しながら、体験的学習を踏まえた防災学習や避難訓練を実施する。

今年度初めて取り組んだ「防災キャンプ」、２年連続実施している「防災デイキャンプ」も来年度以降も継続していくことができるように検討していく。

また、大雨洪水の風水害についても年間実施する防災学習の時間の中での実施や、各教科での実施等、児童生徒の実態に合わせて展開していくことができるよう、教職員で連携して取り組んでいきたい。

ここ数年参加している近隣中学校での防災イベントに参加し、今年度の反省で「盲学校とコラボレーションした取り組み」について地域関係者より意見があった。この機会を福祉避難所の運営について学ぶタイミングとして生かすことができないか検討していきたい。

これまで学校安全総合支援事業の拠点校として取り組みを進めてきたが、「拠点校だから」ではなく、今後も継続して児童生徒が自分の命を自分で守りぬくことができるような学校安全の取り組みを行っていきたい。